人権通信

令和四年九月二十八日発行 第一号
発行　城ノ内中等教育学校後期課程
高等学校人権委員会
レベラーズ

こんにちは、人権委員会です。

楽しかった城ノ内祭も終わり、少しずつ秋らしくなってきました。

人権展では、フードドライブにご協力いただきありがとうございました。お預かりした食品については、先日フードバンクとくしまに寄付しました。その後は子ども食堂や福祉施設、フードパントリーなどで活用していただくことになります。

新型コロナウイルス感染症の方は、九月に入って少しずつ落ち着いて来ています。一方、台風十五号・十六号の影響により、九州や東海地方では暴風や大雨による被害も出ています。まだまだ台風シーズンは続きますし、南海トラフ大地震の方も引き続き警戒は必要ですので、災害への備えは怠らないようにしましょう。

さて、今回は六一・六四ホームルームの人権委員の皆さんに原稿を書いていただきました。

アイヌについては、今話題の『ゴールデンカムイ』で興味を持った人もいると思う。作中では、出会う人の多くがアイヌに理解を持っているようであったが、実際はどうだったのだろうか。

明治以降、国が行ってきた同化政策により、伝統的なアイヌ文化の風習が禁じられるとともに、日本語の習得が奨励され、「和人※」と同じような生活をせざるを得なくなった。このことで、アイヌの人々はこれまでの日常を失い、さらには和人からも文化等の違いで差別されてきた。

アイヌ文化を守る取り組みが推進されてきた今でも、古い考え方により、アイヌに対する偏見や差別が残ってしまっている。早く「ゴールデンカムイ」の世界線のように、アイヌの人たちに対する理解を深め、アイヌの文化や伝統に親しむ人ばかりになってほしい。

※和人：倭人とも。日本列島の中で日本語を母語とする人々、ないしは日本史の中心をなす人々をいう。狭義の「日本人」と同義。中国人の日本人に対する呼称、いまひとつは日本で「夷人」に対して「日本人」をさす語。現在でもアイヌの人々に対して本州系日本人に使用することがある。アイヌ語ではシサム（隣人）といい、また転じてシャモという。（山川日本史事典より）

「ＬＧＢＴ」については、近年多くの議論がなされており、その存在は、学校やメディアを通して、広く認知されるようになってきている。一方で、「ＬＧＢＴ」にあてはまらない数多くの性的少数者が存在することも、また事実である。このことに関する人びとの理解は、十分であるとはいえない。この結果、社会的に孤立してしまったり、自分の存在意義を見失ってしまったりする人がいることも、また事実である。

過去には「ジェンダー」による区分がなされ、「男と女はこうあるべきである」という価値観の押しつけが長い間行われてきた。「ＬＧＢＴ」という言葉が広がる中で、性の多様性が少しずつ認められるようになってきている。しかし、性的少数者は「ＬＧＢＴ」だけではない。男女のいずれにも属さないと考える性自認を持つ「Ｘジェンダー」、自身の性自認が決まっていない「クエスチョニング」など、性自認だけでも「ＬＧＢＴ」にあてはまらない人がたくさんいる。性の多様性は、個人の尊厳に関わる大切な問題である。未知のものを知ろうせず、避けようとすることが、過ちにつながってしまうのではないか。性の多様性について理解を深め、誰もが自分らしく生きられる社会を作っていく必要があると思う。

六一・六四ホームルームの人権委員の皆さんの意見はどうでしたか？

生徒の皆さんも、この機会に人権問題について考えたり、家族と話したりしてみてください。

この人権通信が、人権について考えるきっかけになればと思います。